

共生社会を拓く有機農業運動

山形県高畠町 星 寛治

○有機農業運動の出発点

戦後、高畠町には、有機農業前史とも云うべき地域活動が展開されていた。とりわけ、1960年前後を第1の隆盛期とする青年団活動のエネルギーが、1970年前後の第2の隆盛期に点火し、社会構造や地域課題に切り結ぶ主体的な活動が行なわれていた。併せて、行政が主催する青年自治研や、青年研修所などの学習と討論を通して、社会的な認識を拓く若者が多かった。当時、農業の近代化は、目を見張るように進展していたが、70年に打出された減反政策を契機に土稼ぎ、兼業が激増し、農高卒の就農率も半減する。危機感を深めた青年団は、「土稼ぎ拒否宣言」をし、地域農業とふるさとを守る姿勢を鮮明にした。

一方、町の誘致企業の工場が大気汚染による公害を出しているのではという疑惑が広がり、青年団は市民グループや専門家と一緒にになって調査活動に着手した。その結果、住民の健康障害との関係が明らかになり、煤煙の除去装置などの対策が講じられ、やがて工場は他所に撤退した。

その取組みを通して、青年たちは、足元を見つめ直し、公害は工業の側だけが派生するのではなく、農業の内側にも在ることに気付いた。近代化の最も有力な手段と信じていた化肥、農薬、除草剤などの化学合成された生産資材が、土を痛め、人間の体にダメージを与える、ひいては環境を汚染するという矛盾を知るに至った。すぐれた先覚者からの啓発を受けながら、高畠の若い農民たちは立ち上り、1973年、38名の有志が参画し、高畠町有機農業研究会が誕生した。その若い未知数の集団を、当時の農協のトップは積極的に支援し、事務局を農協の中に置いた。

有機農研は、その出発にあたり、次のような運動の柱を立てた。(1)安全な食べ物づくり(2)ゆたかな地力づくり(3)自給の回復(4)環境を守る(5)農民の自立という明確な目標である。当初は、その産物を消費者に供給することも視野の中になく、ましてや今日のような高附加価値の農業という戦略的な意図など全くなかった。

○創設期、手さぐりの実践

もう一つの農業をめざす志の高い集団ではあったが、モデルなしの手探りの実践は、受難の道であった。稲作については、化肥も、農薬も、除草剤も使わず、堆肥だけ施す完全無農薬栽培を基本とした。除草や虫の駆除などに多くの労力を投じ、「あれは嫁殺し農業だ」とか、「現代のドンキホーテだ」と非難された。しかも、出来秋の収量は4割減ほどに終った。ただ、米の品質はすこぶる良く、べっ甲色の米粒に筋道の正しさを確信した。

3年目の夏、東北地方を空前の冷害が襲った。記録に残る51年冷害である。その秋、目を疑うような光景が現れた。半作以下の稻田が広がる中で、唯一一本はさんで山吹色の稔りにゆれる田んぼの表情である。有機農法に取組む会員の手づくり稲作の成果であった。その後、S50年代の4年づきの冷害も見事にのり切り、有機農業が異常気象に強い抵抗力を示すことを立証した。

○自給から産消提携へ

当初は、農家の自給、自立の運動として出発した有機農業ではあったが、しだいに地力が甦えり、作物が良くできるようになると、その余った産物を分けてもらえないかという消費者からの要請が出された。果物や自給野菜などを、畑と農家の台所の延長の所で都市のめざめた消費者の食卓に届けてみようという実験が、産直提携の始りとなった。最初は、首都圏の3つの消費者グループとの取組みから着手したが、これも農法と同じく試行錯誤の連続であった。とりわけ、米の直販は、食管制度の枠組の中で難しい課題であったが、自主流通米のルートにのせて1976年、実現の運びとなった。消費地、生産地の双方で条件を整えるために奔走したことの功績である。やがて、提携グループも首都圏を中心に、米沢、山形、新潟、福島などの地方都市から、関西、四国まで広がり、70年代終り頃までは有機農産物の新しい流通ネットワークの骨格が形成された。市場原理を超えた人間の信頼感と、価値の共有が切り拓いた地平である。

○地域の中で市民権

有機農業による生産と流通、そして生活様式がしだいにその存在感を示し、地域の中で市民権を得るまでには10年の歳月を要した。1982年、第8回全国有機農業大会を高畠町で開催するに臨んで、有機農研会員だけでは力量不足であり、町と農協の全面的な協力体制と、商工会、青年団、婦人会などの支援を得て、ほむちぐるみの舞台がつくられた。北から南まで、延べ800名の参加者を得て、2日間の集会は内容の濃い波動を広げた。その大会スローガンは、「地域に根を張る有機農業運動」であった。以来、有機農研は同志的な集団にとどまらず、運動の点から面への広がりをめざし、地域変革の運動としての性格を帯びるようになる。ただ、提携活動の比重が増し、有機農業的経営が成立す

る条件が整いつつある一方で、消費グループの姿勢が色濃く反映し、生産者会員の姿勢に微妙なずれを生じた段階があった。その主体性と個性を伸ばしつつ、組織としての一体性を維持するために、産直部門を独立させ、ブロック制を取りながら、研究活動、歩外活動、交流活動を持续してきた。

○新しい村づくりの展開

1986年、標高300mの中山間地域を抱える和田地区に、空散を水際で阻止したいという切羽詰った課題が直接の動機となって上和田有機米生産組合が結成された。除草剤1回使用の他は、化肥も、農薬も施用しない減農薬の稻作をめざして、75戸が参加し、3年目には130戸の集団に成長した。地区内650戸の農家からすれば、かなり高い組織率である。栽培基準を設け、圃場に立っての現場主義に徹し、入念な手入れをモットーとし、ゆたかな自然を活かした良質米づくりに照準を合わせた。菊地組合長のリーダーシップと技術力の高さは、直ぐに成果として現れ、数年にして有機米の小さなブランドに成長した。販路の開拓には私たちも力を入れ、消費者グループの他に、生協、横浜のスーパー、米穀業者、地酒メーカー、製糀、製菓、レストランなどと、多彩な取組みがなされた。流通経路は、自主流通米と特栽米のルートにのせ、農協経済連を経由した方式を取った。また、菊地さんが開発した独自の有機肥料の購買においても、農協支所を通し、地域運動としての基本姿勢を鮮明にした。一方で、立教大の環境と生命ゼミのフィールドワークを受入れるなど、教育運動にも力を注いでいる。

1990年、東西の冷戦構造が崩壊し、世界が激動する歴史の渦中で、これまで固有のスタイルで活動してきた地域集団や個人が、これまでの垣根を越えた学びの場の必要を痛感し、たかねた共生塾という自まえの学習機会を創出した。その自在で創造性に富んだ活動は、年を追って波動を広げ、現在、町内外に約100名の塾生を有するまでになった。学習の内容は、有機農業を母胎としつつ、環境、教育、文化、医療、地域づくり、国際交流まで、巾広いステージが組まれる。講座だけでなく、都市住民に発信して開催される「まほろばの里農学校」は、この夏で5回を重ねた。他に、大学生のファームステイ、農水省の行政官の現地研修、企業が企画した農業ツアー、グリーンソーリズムの研究会、各地の村おこしグループとの交流など、息つくいと間のないほどの日程をこなしている。鈴木塾長の大きな懐と、河原俊雄事務局長の精力的な実務能力に負う所が大きい。文化イベントの開催も含め、共生塾は新しい町づくりのシンクタンクとしての存在感を高めている。

○交流から定住へ、新しい流れ

首都圏の10指に余る大学のフィールドワークや、まほろばの里農学校に参加して、農業を体験し、自然の懷に抱かれて、作物や生き物たちの生命の鼓動にふれた若者たちは、ほとんど例外なしにカルチャーショックを受ける。と同時に、自信と誇りを持って農を生きる人たちとの交流を通して、その人生觀とライフスタイルにひびき合う。その共鳴と感化の度合いの深い人は、何度も高畠を訪れ、あらたな生き方を模索するようになる。そうした兆候を、私たちは「たかねた病にかかった」と呼ぶ。重症になると、ついに移住を決意することになる。1ターン、つまり都市をはなれて町内に定住した新まほろば人は、ここ4年間で30名をこえる。空き家を一軒借り、田畠も借りて、自給用の米や野菜を作る新農民たちである。ただ、農業だけで初めから自立することは難しいので、もう一つ生活費を稼ぐ仕事を見つけ、いわゆる第2種兼業農家からの出発である。この方式は、都市から農村へ、すうっと軟着陸するかなり現実的なスタイルであるようだ。もちろん、地域住民による受け皿づくりと定住後の支援協力が欠かせない条件となる。こうした新住民は、新しい感覚と血液を地域社会に注入し、活性化のインパクトとして機能している。最近、数組の結婚が成立するなどして、一見何も変わらないような農村が、だいに元気になっていく様子が伺える。

○共生社会の小さなモデルづくり

自然と人間の共生をめざす有機農業運動が環境にやさしいもう一つの技術的水脈を形成し、提携活動を通して都市々民と地域住民の共生の関係を創り出した。その延長線上で、都市から農村へ向う全く新しい潮流を形成する地点まで到着した。これまで、草の根の運動として展開してきた主体性を保ちつつ、地域全体のインフラの整備や、環境レベルの向上など、さらにダイナミックな推進力を求めるには、いよいよ行政の出番である。県や市町村自治体の力量と未来に対する責任が問われる場面である。さらに、実践の中から理論を構築する研究者や学会、情報機関の役割も重い。私たちは、価値を共有する人たちのネットワークをさらに広げ、どんどん垣根を越えた結びつきを強めていきたい。生命的糧を産む農の営みの根源性を基礎に、健康を支える食と医の融合、地域から地球に及ぶ環境の回生、育てることの営みに学ぶ教育の再生、耕す文化の母胎、自ら生きかみを生み出す福祉の生成、労働を舞踊となす余暇の充足など、トータルな価値を生む農のゆたかさによって、新しい地域創造に向いたい。新世紀に予見される生命文明の水先案内人になるような小さなモデルづくりをめざしつづく。